令和三年度　灘中学校入学試験問題　国語　二日目　五枚のうちの一枚目

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

調理は逆算の美学です。完成後の料理のイメージがまずあり、そこから逆算して用意周到な計画を立てて、徐々に完成品へと近づけてゆきます。最高の「食べ頃」でA テイキョウしようと思ったら、さらに慎重な手順を踏まなくては、ベストタイミングで完成させることはできません。

白飯と味噌汁に焼き魚や煮物という最もシンプルな食事でさえ、一食作るだけでも途方もない数の手順が、同時並行で手際よく進められます。上手な人ほど、料理の完成と同時に、調理具の洗浄まで完了しているものです。調理とは、こうしたB フクザツきわまりない作業を、ほぼ反射的に行う[1]曲芸です。

どうしてヒトはそこまで苦労して調理をするのでしょうか。調理する動物はヒトだけです。自然界には新鮮な生肉や生野菜が溢れ、そうした自然食材から栄養を得られることは、野生界を生き抜く多数の動物たちが証明しています。こう考えると[2]調理は珍妙な習慣です。

この習慣には、食卓を彩る料理を眺めていただけでは見逃されてしまう[3]重要な利点が潜んでいます。ハーバード大学のロサティ博士らは、チンパンジーに生のポテトと茹でたポテトを差し出し、どちらを選ぶかを観察しました。すると選んだポテトの89％は茹でたポテトでした。おそらくおいしいからでしょう。

「おいしさ」とは、舌の味覚器でアミノ酸や糖をC カンチすることです。アミノ酸や糖は栄養素です。生の食材に火を通すと、タンパク質や炭水化物が加熱分解され、こうした小さな分子に変化します。これが消化の助けとなり、D イチョウからの吸収率が高まります。つまり火を通すと利用可能な栄養量が増えるのです。野生のチンパンジーは生の食材しか手に入りませんから、消化が悪く起床している時間帯の半分ほどを咀嚼*にE ツイやさなくてはなりません。

要するに、「栄養満点」であるという化学信号は、舌では「おいしさ」という味覚信号として脳に届けられるという合目的*的性があるわけです。動物たちが「おいしいものを好む」のは、生物学的な利点から、そうデザインされているのです。つまり、「おいしいから好き」なのではなく、むしろ逆で、[4]「身体に有益なものをおいしいと感じる」というわけです。

これを推し進めたのが「調理」です。ジョージ・ワシントン大学のルーカス博士は「ヒトは加熱された料理を食するのに適した口腔や消化器系を発達させている」と指摘しています。現代人は火を通すだけでは飽き足らず、調理の腕を上げ、手の込んだ皿や菓子を作るようになりました。

さて先のロサティ博士は、チンパンジーにオーブンのような簡単な調理器を与えたところ、すぐに調理器でポテトを加熱して食べることを覚えました。わざわざ遠方から生のポテトを運び、加熱して食べるチンパンジーもいました。

調理には、①食材と料理のF インガ関係を理解する能力、②目前の食材を食べずに我慢する自制心、など高度な認知機能が必要です。チンパンジーがここまで料理への理解力と嗜好をG ソナえているのであれば、あと必要なのは、＿＿＿＿だけです。

ギリシャ神話ではプロメテウスがヒトに火をH デンジュしたことになってはいますが、実際のヒトがいつ火を手に入れたかは正確にはわかっていません。南アフリカの発掘調査では、１００万年前のI チソウから炭化した植物や焦げた骨が見つかっています。つまり現生人類ホモ・サピエンスが出現する前から、古代人類たちは火を使っていたようです。

火の用途は多様です。料理だけでなく、寒さをしのいだり、夜闇を照らしたりと多くの使い方ができます。火を手にした瞬間、人類の生活が一変したことでしょう。現在では火は、厳かな聖火、装飾用の蝋燭、花火、弾薬など、さらに多彩な目的で活用されています。ヒトは食材のみならず、[5]火さえも「調理」する生物なのです。

（池谷裕二『脳はすごぶる快楽主義』による）

＊注　咀嚼――食物を細かくなるまでよくかむこと。
　　合目的的性――ある目的にかなった性質のこと。

問一　――線部A～Iのカタカナを漢字に改めなさい。

問二　――線部1とありますが、筆者が調理のことを「曲芸」と言うのはなぜですか。理由を答えなさい。

問三　――線部2「調理は珍妙な習慣」とありますが、筆者がそのように考えるのはなぜですか。理由を答えなさい。

問四　――線部3「重要な利点」とは、どのような「利点」ですか。問題文中から十字程度でぬき出して答えなさい。

問五　――線部4「身体に有益なものをおいしいと感じる」とありますが、これはなぜですか。理由を答えなさい。

問六　問題文中の＿＿＿＿にはどのような言葉があてはまりますか。自分で考えて答えなさい。

問七　――線部5「火さえも『調理』する」とありますが、これはどういうことですか、説明しなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

著名な脳科学者が、電子書籍を画面で読むよりも、紙の書物を手に取って読むほうが脳に刺激があってよいと書いていた。本の重み、ページをめくる感覚、紙の手触りなど、手に直接受ける刺激が脳によいのだそうだ。

言われれば感覚的に納得できる気がする。そして、手に何かを感じることが脳刺激になるのだとすれば、点字使用者の私は、本を手にもつだけでなく絶えず文字に触れているわけだから、かなり自然にたくさんの脳刺激を受ける機会にめぐまれていることになる。＊[1]墨字が読めない不便と引き替えの幸いとでも受け取っておくのがよいのだろう。

私はいわゆる文学少女ではなかったし、自分が読書好きだとも思っていなかった。特に子供のころは、点字や音読の形で読める本自体が限られていたうえ、一文字ずつの表音文字を指でたどって読む点字での読書は、相当な速読能力があっても漢字で意味をとらえながら一度に複数の行に目を走らせるようなわけにはいかない。だから、もちろん本を読まないほうではないとしても、読んでいる人にはとうていかなわないと自覚していた。ただ、ある日母が知人から「麻由ちゃんはいつも本を読んでいるわね。」と言われ、「そうね、必ず枕元に何冊か本をおいているし、乗り物のなかでもいつも何か読んでいるのよ。何だか面白いらしくて。」と話しているのを小耳に挟んだので、大人から見てもそこそこの読書好きではあったのかもしれない。

[2]秋は読書に適した季節というのは本当だと、私は小学生のころから思っていた。子供にとって、秋は運動会や学園祭などいろいろ忙しい季節だ。けれども、秋は紙の手触りが年間で最もよい季節だと思う。だから本に触るのも気持ちがよく、静かな夜長の読書も進むのだろう。普通は秋は静かで気候がよいので読書に適しているといわれているが、私にはそれと同時に、紙に触れる手の感触がひときわ心地よいことも、読書の快感をいや増しているような気がするのである。

もちろん、当時はそんなことを自覚してなどいなかったが、なるほど母の言う通り、夜はいつも本とともに眠ったし、電車のなかで読む本も持ち歩いていた。点字の教科書は電話帳ほどもあるので、時間割に合わせて何冊もの教科書を持ち、そのほかに読む本も持つのは体の小さかった私にはかなりの負担だったと思うが、[3]読みたいという気持ちがそれに勝っていたらしい。そういえば、友だちの母上が私を電車で見かけたとき、「顔は見えなかったけど本を読む手が見えたから麻由ちゃんだと思った。」と言ったこともあった。

点字と聞いて駅の券売機やエレベーターのボタンの脇に張ってある文字を思い浮かべる方も多いだろう。しかし本当の点字は、もちろんたいてい、紙に書いてある。街で見かけるバリアフリー使用の点字は鉄片やテープに書いてあるので、むしろ特殊なものである。

紙に書いた点字は、紙質や季節、その日の湿気や読む人の手の状態によってさまざまに変化する。寒い日にかじかんだ手で点字を読むといつもより薄く感じるし、梅雨時に読むとどことなく紙が湿っていて、自分の手の湿りと重なって指の滑りがとても悪くなる。この季節、点字は年間で最悪の手触りになる。もちろん、指の滑りも最悪だ。

ところが、一転秋になると、点字はスベスベと指によく馴染むようになる。空気が乾燥してきて紙が乾き、手も汗をかかなくなるからだろう。読書のときに指がよく滑ると、快調に読み進むことができる。子供心に、私はその感触が気に入っていたので、読書の秋というのは本当だと思ったのである。

私がそろそろ読書らしい読書ができるようになったころ、点字の本は教科書や図書館の印刷本以外、ほとんどすべてがボランティアの方による手打ちだった。点字用の定規に挟んで紙の裏から点筆と呼ばれる針で一点一点穴を開ける打ち方と、点字タイプライターで打つ方法があった。タイプライターの種類によって、本は紙の表だけに打つ「片面打ち」だったり、行間を利用して裏からも打つ「両面打ち」だったりで、そのころの本の点字はいろいろだった。だがタイプライターのほうが楽にたくさん打てたので、点訳を本格的に手がける人たちはタイプライターを使うことが多くなっていた。

盲学校の図書室にある本も、そんな手打ちの本ばかりだった。だから、たとえば＊『ああ無情』に出てくるテナルディエという名前が「テナルデー」と書かれていたり、同じ本のなかで大ストーブが「オオストーブ」だったり「ダイストーブ」だったりと表記がバラバラなこともあったが、それはむしろ、私たちのために間違えながらも手打ちしてくれたボランティアさんの手の温もりとして、私には嬉しく思えた。そんな間違いは、正確だが[4]手打ちの温かみのない大量生産の点字本よりも、ずっと素敵だった。もし私が「本が好きな子」だったとしたら、その半分は、本の内容より手打ちの温かみへの思いだったかもしれない。

小学校高学年のとき、図書委員をしたことがある。その年は、昼休みには委員の仕事で毎日図書室にいた。毎日の仕事は単純で、借りにくる人の「お通い帳」に貸し出す本の書名と貸し出し日を記入し、返ってきた本を書棚に戻すだけである。週に一度の委員会活動のときには、背表紙から剥がれてしまった点字の書名ラベルを作り直して貼ったり、新しい本を図書カードに書き加えてラベルを貼ったりした。作業中や貸し出し時間のおしゃべりは楽しかったが、仕事はいたって地味で、最初のころはちっとも面白くなかった。何しろ本当は放送委員会に入りたかったのに、くじ引きで負けて図書委員になってしまったのだから楽しいわけがないのである。

しかしいざやってみると、図書委員の仕事はなかなか奥深くて、外から見ているだけではわからない面白さがあった。[5]クラスメートに本を貸し出すときは、なんとなくよそよそしい感じがしてちょっと不思議な気持ちになった。上級生に貸し出すときは、大きい人たちがどんな本を読んでいるのか興味津々だった。そしてときには、真似をしてちょっと背伸びした本を借りてみることもあった。

委員の仕事のなかで一番楽しかったのは、下級生に本を貸し出すことだった。まだ点字一文字がやっと収まるぐらいと思われる小さな手をした下級生たちが、一所懸命本を選んでもってくる。それを点検し、お通い帳に記入して「はい、来週の木曜日までに返してね。」とか「いい本を見つけたね。楽しんでね。」などと言いながら手渡してあげるときは、なんとも言えず嬉しかった。自分も楽しく読んだ本を彼らが借りていくときは、努めて中身を教えないように自制したものである。小さな手で彼らが私の記入した点字をたどって確認し「どうもありがとうございました。」と言って帳面を閉じ、重そうに本をもっていく様子はたまらなく嬉しい。そんなときの私はきっと、大人語でいえば[6]目を細めて見ていると いった風情だったに違いない。

（中略）

あるとき、不思議なサイズの本が届いた。点字紙の普通サイズ（B5判より一回り大きい）を半分に切った「半分紙」サイズで、普通の厚さ（一〇〇ページぐらい）の一・五倍もあろうかという大変な厚みだった。文字は両面打ちのタイプライターでびっしり打たれている。小さいサイズの紙に両面打ちしたものだから、本はパンパンに膨れていた。半分サイズのうえ、分冊にしなかったため厚くなったのかもしれない。開いたとたんに壊れてしまいそうで、触れるのも恐かった。手打ちした点字紙は、左端を一センチほど折って糊代にし、折り目を次のページの左端に合わせて貼りつける形で製本する。点字紙が市販のB5サイズより一回り大きいのは、この糊代を取るためだと聞いたことがある。点字板と呼ばれる筆記具で書くと、糊代を自然に折る形になるが、タイプライターでは折り目がつかないので、書きあがってから折ることになる。すると微妙なずれが出て、製本はなかなか綺麗にいかない。この謎の本は、そのずれをほとんど直さずに背表紙で閉じられてしまったため、開くと本が左右にガクッとずれる。乱暴に開くとそのままバリッと破れてしまいそうだった。それでも中身を確かめようと開いてみると、半分紙なので一ページに十行ぐらいしか書けないところへ、一行をページ数を打つ行として取ってしまっている。厚みのわりに書いてある文字数がかなり目減りしてしまっていた。

いったい何の本だろう？　表紙を開くと、タイプライターで紙を細かくずらして作った四角い枠のなかに、綺麗な点字で「『ああ無情』より」と書かれていた。その下には「小学六年生、〇〇ゆみ子点訳」と書いてあった。もちろん、下の名前もうろ覚えだし、名字は忘れてしまった。ただ「小学六年」の一言が強烈に印象に残った。私とほぼ同年齢の子が、私たちのために点字を打ってくれたのかという感動とともに、私は同い年の子にボランティアをしてもらわなければ本も読めないのかという、やや情けない気持ちが同時にやってきた。

『ああ無情』はすでに少年少女版を読んでいたので、この小さな分厚い本に書かれている「一部抜粋」をあらためて読むまでもなかったが、普段点字で勉強していない小学六年の子がどんな点字を書いているのか興味があったので、早速借りてみた。

実はこの本に、あの「テナルデー」の文字があったのである。最初は子供に点字を打ってもらったというコンプレックスからちょっとした反発めいた気持ちがあって、なあんだ、「小学六年」なんて威張っていても、「ディ」の字が書けないんじゃないか、やっぱり子供ね！　などと子供なのに思ったりしていた。だが、不意に自分が夏休みの作文や読書感想文を点字で書いている様子が思い出され、同じように勉強している子がこれだけの点字を打つには、どのくらいの時間を割いたのだろうと思ったとき、急に胸が痛くなった。さらに、自分の作文を製本する大変さを思い出すと、たとえ壊れそうな製本でも、これだけの厚みの本を同年齢の子供が一人で製本したのかと思うと、がんばったんだなあといまさらのように感動が湧いてきた。

彼女にとって、それは夏休みの自由研究か何かだったかもしれない。だから時間を割いたとしても彼女自身にとってはさほどの負担ではなかったかもしれない。しかし、その「作品」をいま、私は図書室から「蔵書」として借りて読んでいるのだ。彼女は「蔵書」を作ったのである。小さな図書委員としては、そのことにぐっと胸を突かれた。

点字はたしかに間違っている。でも、私はあの図書室のために、蔵書を作ったことがない。やっぱり、すごいことだ。だから、そのご褒美として、彼女は「小学六年」と表紙に大書したのだろう。ほんの少しの「よくやったでしょ」印に。そう思ったら、最初の反発がすっと消えていった。私と同じくらいの「お友だち」が、私たちの文字をこんなにたくさん書いてくれた。それも、私の大好きな『ああ無情』に感動し、その本のある箇所を点訳に選んだのだ。突然、この見知らぬ「お友だち」と、ジャン・バルジャンの不屈の精神とユゴーの博愛精神を通してつながったような気がした。そして、一度も会ったことのない「お友だち」が、一人の「新しいお友だち」になったようで、心が温かくなった。

残念ながら、この不思議なサイズの本が図書室に届いたのは、この一冊が最初で最後だった。ゆみ子さん（？）は、あれからどうしたのだろう。どんな本と出会ったのだろう。そして、点字のことはおぼえているだろうか。いまもときどき、そんなことを思ったりする。

（三宮麻由子『空が香る』による）

＊注　墨字――点字に対して、インクなどで印刷したり書いたりした文字のこと。
『ああ無情』――フランスの作家ユゴーの書いた小説。ジャン・バルジャンを主人公とする。

問一　――線部1「墨字が読めない不便と引き替えの幸い」という表現から、筆者が、目が見えないという自分の状況をどのように受け止めていると考えられますか、答えなさい。

問二　――線部2「秋は読書に適した季節というのは本当だ」ということを、筆者が、目が見える人よりも強く思うのはなぜですか。理由を答えなさい。

問三　――線部3「本を読む手」とありますが、この言葉はどのような動作を表していますか、答えなさい。

問四　――線部4「手打ちの温かみ」とありますが、これはどういうものですか、答えなさい。

問五　――線部5とありますが、「クラスメートに本を貸し出すとき」に「なんとなくよそよそしい感じ」がするのはなぜだと思われますか。図書委員の立場を考えながら、理由を答えなさい。

問六　――線部6「目を細めて見ているといった風情だった」とありますが、このときの筆者の気持ちを答えなさい。

問七　――線部7「子供に点字を打ってもらったというコンプレックス」とありますが、これと同じ内容の言葉を本文中から四十字以上五十字以内で探し、始めと終わりの五字をそれぞれぬき出して答えなさい。

問八　――線部8「一度も会ったことのない〜『新しいお友だち』になったよう」とはどういうことですか、答えなさい。

三　次の詩を読んで、下の問いに答えなさい。

駅伝　村田好章

歩いていると
自転車に乗った大学生のむすこが
うしろからやってきて
知らぬ顔で追い越して行った
1 ペダルの踏み込みがぎこちない

わたしも
おとなになっても
父と外で出会うと
目を合わさず息をつめ
すれちがっていた
2 氷で火傷したような
おかしな痛痒みで
片ほおをヒリヒリさせながら

学校を出て
会社につとめ
結婚し　こどもが生まれ
3 見送る時期をむかえ
4 見送られる時期をひかえ

5 夕陽のせいなのだろうか
輝いてみえるむすこの背中で
6 わたしにだけみえる
タスキがゆれている

（『朝の線香花火』による）

問一　――線部1「ペダルの踏み込みがぎこちない」とありますが、それはなぜですか。理由として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　体が大きくなり自転車がこぎにくくなったから。
イ　氷に長くふれていて片ほおがかゆくなったから。
ウ　自分の父親と顔を合わすまいとしているから。
エ　正面の夕陽がまぶしいために前が見えにくいから。
オ　「わたし」をよけようとハンドルを切ったから。

問二　――線部2「氷で火傷したような～ヒリヒリさせながら」とありますが、それはどのような気持ちですか。自分で考えて答えなさい。

問三　――線部3「見送る」、――線部4「見送られる」とありますが、それぞれどういうことを言っているのですか、答えなさい。

問四　――線部5「夕陽のせいなのだろうか」とありますが、他にはどのような理由が考えられますか、答えなさい。

問五　――線部6「わたしにだけみえる／タスキがゆれている」とはどういうことを言っているのですか、説明しなさい。

令和三年度　灘中学校入学試験問題　国語　二日目　五枚のうちの五枚目

受験番号

◎解答に字数制限のある場合、句読点などの記号も字数に数えます。

一

問一　A　D　G　B　E　H　C　F　I

問二

問三

問四

問五

問六

問七

二

問一

問二

問三

三

問一

問二

問三　3　4

問四

問五

問四

問五

問六

問七　〜

問八